

心理臨床場面における夢の用いられ方

—諸学派の理論の比較から—

粉川 尚枝

1. 問題

夢は夢見手の心的現象として、フロイトの「夢解釈」で導入されて以降、心理療法場面で継続して用いられてきた。フロイト (1900/2007; 2011) は「夢解釈は、心の生活の無意識を知るための王道である」と述べたが、フロイト以後も精神分析学派だけでなく、諸学派で夢分析は主要な技法の1つとなり、現在まで夢は重要な役割を担ってきた。一方、学派間には夢理論に諸々の差異がうかがえ、例えばフロイトが潜在的夢内容を探るのに対し、ユングは夢のイメージそのものに意味があると考えするなど、夢への取り組みには様々な立場がある。

夢を治療的に扱うために、夢から何を知り、どう治療に役立てることができるか、改めて検討することは意義があると思われる。そのため、本論文では諸学派の夢理論を比較検討することで、これまで夢に現れるものとして何が想定され、どのように心理療法に役立てられてきたのかを考察する。また、著名な心理療法家たちの知見から、心理療法で夢を用いる際に役立つ視点として、夢の持つ注目すべき特徴、セラピストの姿勢などに示唆を得ることも目的とする。

本論文では、まず後の各学派の理論に影響を与えたフロイトの夢理論をまとめ、次に諸学派の夢理論について、各著名な心理療法家を取り上げて検討した。精神分析学派内では、自我心理学派、対象関係論学派、対人関係学派、ラカン派を、またフロイトから独立したアドラーの個人心理学とユングの分析的心理学、精神分析以外の主要な心理学派としてゲシュタルト療法、現象学派を上げ、諸学派の特徴を考察した後、それらの特徴を学派間で比較検討した。

2. フロイトの夢理論—「夢解釈」とその後の展開

(1) 「夢解釈」(Freud, 1900/2007; 2011 : 以下 (1) の「」は「夢解釈」からの引用とする)

① 夢理論の背景

フロイトは、これまで「意味のない、身体的な過程」とされてきた夢は「意味のある心的形成物」であり、「夢の学問的な解釈手続きもまた可能であると主張せざるを得ない」と述べ、夢を心理療法場面で取り上げることの意義を提起した。自由連想中に患者たちが夢を語り始めることから、「病理的な観念に発する想起を遡行的に辿って得られる心的連鎖のうちに、夢というものが組み込まれているらしい」との示唆を得たためである。フロイトは、夢に「症状のために編み出された解釈方法」を応用し、「夢を取り扱うことの理論的な価値を、心理学的な認識に対する貢献、ならびに精神神経症の理解のための下ごしらえに求めたい」と夢研究を進めた。

フロイトの夢理論では、無意識と前意識、その間の検閲の存在が仮定され、夢は無意識系と前意識系の要求に同時に応える一つの「妥協」とされる。フロイトは夢という妥協形成の過程を精神病、神経症、ヒステリーと比較検討し、その類似から症状形成の理解に繋げる一方で、「夢は病理的な現象ではない」とも明言し、「正常な人間においても、抑え込まれたものは引き続き存続し、心的な作業を営む力を保ち続けている…夢それ自体が、この抑え込まれたものの様々な表出物の一つなのである」と、夢を無意識の理解に役立てた。フロイトは「精神療法は、無意識を、前意識の支配の下に服させること以外の道を取ることはできない」と考え、「夢解釈は、心の生活の無意識を知るための王道である」と心理療法過程で夢を扱う意義を提唱した。

② 夢に現れる欲望成就と抑圧された無意識

フロイトの夢理論は、「夢はある（抑え込まれ、抑圧された）欲望の、（偽装された）成就である」との考えを基に展開する。フロイトは、夢を見た日中の印象、些末な経験といった前意識的な「日中残渣」が夢形成には必須であり、子供の夢のようにそれ自体が欲望である場合もあるが、多くは無意識に抑圧された欲望が原動力となり、日中残渣に転移して夢に現れるとする。夢に現れる無意識の欲望としては、「性欲動ほどに、小児期以来強大な抑え込みに遭ってきた欲望はない。性欲動は、どんな他の欲望にも増して、多くの強力な無意識の欲望を後に残す。これらの欲望が今では睡眠状態の中で夢を作り出す」と考察された。フロイトは、近親者が死ぬ類型夢を、両親や兄弟の死を願う欲望が成就した夢として例にあげ、エディプス伝説の素材も「初めての性の蠢きによって両親への関係が痛々しく損なわれるということを内容とした夢」ではないかと指摘している。夢が欲望成就であることの反証とされる不安夢、不快夢、懲罰夢についても、「無意識の抑圧された欲望が成就することは、夢見る人の自我にとって苦痛としか感じられない」ときに起こる夢とし、『自我』と『抑圧されたもの』の対立を想定した。

また、「すべての夢は、何らかの意味で、無精の夢」で、夢は「睡眠の番人である」と述べ、前意識が「眠り続けたいという欲望」に焦点を合わせることで、欲望に対抗する「検閲」が弱まり、欲望は呈示可能性を獲得すると考えた。そこで、残存する「検閲をかいくぐる」ために夢が「歪曲」される過程を「夢工作」と定義し、「われわれの理論は、顕在的な夢内容の判定に基づいているのではなく、解釈作業によってそれと知られる、夢の背後の思考内容に関するものである」と、解釈から潜在的夢内容に遡ることを目指した。夢工作には「縮合」「遷移」「呈示可能性への顧慮」「二次加工」が想定され、特に縮合と遷移は主とされる。「縮合工作の成果が目指しているのは、知覚系への侵攻が容易になるような強度にまで到達すること」で、複数の潜在的夢思考が縮合されることは、無意識の抑圧された欲望の意識化に繋がる。一方、検閲をくぐるために遷移が起こり、表象が「連想の中で何らかの理由で近縁な別の表象によって代替」され、「逆転あるいは反対物への転化は、最も好まれ」るため、顕在夢と潜在夢の間には「あらゆる心的価値の価値転換」が起こる。フロイトは夢工作の検討から、縮合された要素、接近した要素が潜在的夢思考でも密接な繋がりを持つと想定し、夢解釈にも自由連想を用いた。また、夢の情動は、夢工作の改変を蒙りにくいとして、「精神分析は、情動を正当性のあるものとして認め、その情動に本来属しているのに代替作用によって抑圧されてしまっている表象を探し出す」と解釈時に重視した。更に「呈示可能性への顧慮」に関して、潜在的夢思考を視覚像で呈示する夢の象徴作用にも注目した。象徴は「性的な素材」を「偽装的」に呈示するために

利用されるが、象徴的要素には夢見手の連想が働きにくいとして、象徴翻訳が「補助手段」として提唱された。フロイトは、民話、格言、機知には、この象徴作用がより見出されると、象徴翻訳の妥当性を訴えたが、「同じ夢内容でも、人が違い文脈が変わるのに応じて、別の意味を隠しもつことになるものだ」と、あくまで自由連想が主な手段であることも強調している。

(2) 「夢解釈」以降の夢理論の展開

フロイトは「夢解釈」以降、ドーラ、狼男の症例など、夢の解釈を積極的に治療に用い、実践からの知見を取り込んで更に夢理論を展開した。フロイトは、「回復夢」も「転移のあらたな、つらい局面」で分析から逃れたいという欲望成就と捉え、夢分析でも抵抗が妨げになるとの考えから、分析家への陽性転移の役割を強調した上で、「他の方法にたよるよりはるかに多くのことが、夢とのつながりで明らかになるのは疑いない」と主張した (Freud, 1923/2007)。

睡眠中の心的状態については、「ほとんど完全な環境世界からの撤退」であり、意識系の脱備給状態から現実吟味も諦められるため、無意識の欲望が視覚的に成就したものとして呈示され得るとし、「夢のあらゆる本質的な特徴は、睡眠状態という条件によって規定されている」ことを改めて強調した (Freud, 1917/2010)。その上で、睡眠欲望には服さない無意識への欲動備給が強度を増すと、制止できないと判断した自我が「自分の夢を恐れるがゆえに睡眠を放棄する」として、夢を見られなくなることについても考察がなされた (Freud, 1917/2010)。また、不安夢、懲罰夢に想定された『自我』と『抑圧されたもの』の対立について検討を深め、自我と「観察し批判し懲罰する審級(自我理想)」の関係に触れ、夢見手の自我が顕在夢に複数現れる場合、二つの審級の関係が展開されていることを示唆した (Freud, 1923/2007)。更に死の夢から、近親者に対して抱く「強烈な無意識的な死の欲望」に言及し (Freud, 1922/2006)、批判的審級にイドも含めた視点から、懲罰夢、不安夢を「非道徳的、近親相姦的、倒錯的な欲望の蠢き」を成就する夢として考察した (Freud, 1925/2010)。「夢解釈」の理論は「今もって本質的な点での変更はない」と大きな修正はされなかったが (Freud, 1931/2011)、災害患者の夢や、神経症的な人の分析過程で忘却されていた幼児期の心的外傷が再現される「外傷夢」については、「最近になってわれわれは外傷的情景が『夢』の中で再生されるがゆえに、夢理論に改訂を迫られることにもなりました」と、夢は欲望成就であるという規則の例外とされた (Freud, 1922/2006)。

3. フロイト以後の諸学派の夢の用い方

(1) 精神分析学派

① 自我心理学派—アンナ・フロイト、エリクソン

アンナ・フロイト (1974/1982) は、大人の分析をする場合「4つの手段が用いられる」として自由連想、転移解釈、生育歴の聴取と並べて夢の解釈を挙げた。夢見手の心の状態は、自我機能のいくつかの停止、運動系の静止、抵抗の圧力の存在など、自由連想時とほとんど違わないとして、潜在夢からはイドの内容が、夢検閲に用いられる方法からは自我の防衛活動、超自我の活動が明らかにされると考える。被分析者の内的状況の完全な姿を描き出すためには、潜在的夢内容、夢検閲どちらにも注意を向ける必要があると強調し、夢象徴の理解もイドの内容理解には役立つが、あくまで「夢解釈の際の1つの副産物」と捉えている (Freud, A., 1874/1982)。また、アンナ・フロイト (1974/1981) は子供の分析にも積極的に取り組んだが、「大人の分析に

あたっては、自由連想は基本原則」だが、子供はまだ「自由連想をする段階に達していない」ため、自由連想到代わるものとして夢をあげた。大人の夢解釈の技法は子供にそのまま応用でき、子供は「夢に出てきた要素をひとつひとつ楽しんで追跡」する上、夢への連想が不十分でも聴取した日常生活の情報で補えるとして、子供の分析での夢の有用性を強調し、連想を出せない子供や知的能力が低い子供にも、精神分析の適用対象を広げた (Freud, A., 1974/1981)。

エリクソン (1963/1977) も、「夢という変装」には、自我が防衛機制を用いながら、イドの衝動と超自我の強制の間に「妥協」をもたらし、両者に平衡を保たせる「心の変化の起伏」が現れるとして、自我、イド、超自我の力動を、夢分析を通じて「意識し、説明し、中和する」ことを目指した。夢のイメージは、絵と同様に「魅惑と信念を引き起す可視的なあるいは視覚化された領域」を持つと考え、カウチに横になり、眼を閉じるという古典的精神分析の治療状況は、夢という「心に湧き上がってくる種々のイメージの継列に患者を集中させることによって、『自然な』自己一治癒の過程を強化」すると、夢が視覚的に呈示される意義を強調した (Erikson, 1977/1981)。また、自身のアイデンティティ研究でも夢に注目し、一般にアイデンティティの危機は「潜在意識」や、夢という「せいぜい毎日一毎夜の精神病理に属する象徴的行為として、残存している」が、急性のアイデンティティ混乱の場合、その諸特性が夢にもはっきりと生じ、「時空の断絶、眼覚めと眠りの間にくる黎明、自我境界の喪失、夢を能動的に『見る』というよりは、夢によって夢みられるという体験」を引き起こすと指摘した (Erikson, 1968/1970)。

自我心理学派は、フロイトの自由連想の技法を踏襲して夢解釈を行うものの、解釈の重点は、夢に現れる自我の防衛機制や自我、イド、超自我の力動に置くことが特徴と考えられる。

② 対象関係論学派—クライン、ビオン、シーガル

クラインは、主に子供の分析の実践から夢理論を展開した。夢理論の背景には、子供には早期のエディプス葛藤から生じる強い罪悪感があり、子供の弱い自我は超自我の過剰な圧力を受けているため、「子どもの不安に対する非常に大きい傾向を私たちは考慮に入れなければならない」との考えがある (Klein, 1952/1983)。クライン (1971/1997) は、夢にも「願望だけでなく超自我から来ている逆の傾向がたねに存在しており、非常に単純な願望夢においても、罪悪感が潜在的に働いている」ため、抵抗や不安が夢への自由連想を阻むとして、アンナ・フロイト (1974/1981) の「子どもにとって、夢の解釈ほど理解しやすいものは他にはない」に異議を唱えた。クラインは、夢への連想が途中で困難になった際に遊びが役立つことを提唱し、「玩具による表現は、話ことばによる告白ほどあまり不安を与えるものではない」(Klein, 1952/1983) ため、「子どもは、たったいま夢の中で告げていた同じものを遊びの中で表現し、夢についての連想をそれに続く遊びの中にもたらず」(Klein, 1971/1997) ことができ、その遊びは夢と同様に解釈できると考えた。対象関係論学派の遊戯療法では、夢と遊びの解釈から無意識に接近することで、子供の罪悪感を軽減し、抑圧されていた願望の昇華と、最終的には現実適応が目指される。

ビオン (1977/1999) は、精神病患者の心理療法の実践に基づき、夢内容の解釈より、「『夢を見る』能力」について考察した。夢は、経験のあらゆる感覚印象と情動から作り出された「アルファ要素の組み合わせから派生する」もので、このアルファ要素とは、フロイトの潜在的夢内容にあたる、夢の中の視覚像に似たものとされる。睡眠中に生じる情動的経験はアルファ機能により消化され、アルファ要素に変形されることではじめて夢思考に利用できる。そのため、

アルファ機能が憎悪や羨望により働かなくなると、無意識にさせられないベータ要素しか存在しなくなり、情動的経験を抑圧も抑制もできなくなる。更に、ベータ要素は夢思考にも利用できないことから、患者は夢を見ることも、目覚めることも、眠りにつくこともできなくなる。ビオン (1977/1999) は、「夢を見る能力は、パーソナリティを事実上精神病的状态であるものから保護するもの」として、「夢を見る能力」の重要性を強調した。

シーガルは、クライン、ビオンを基に対象関係学派の夢理論をまとめた。シーガル (1991/1994) は、夢は「無意識的幻想を表出し加工するひとつのやり方」であり、「願望と防衛という互いに相容れぬ二つのものを満足させる」と考え、「夢の仕事は無意識的葛藤の加工過程の一部」とする。この無意識的幻想が夢では象徴作用を通して表現されるが、正常な夢では、抑圧や象徴化、徹底操作の過程が遂げられ、夢の部分にも複雑な心的過程が圧縮されるのに対し、夢の仕事が部分的、全面的に失敗に終わった夢では、象徴化が不十分なことによる「ある種のナマナマしさ」が生じ、夢が「具体的な出来事として経験」されたり、「特定の心的内容を分け隔て、それとおさらばする」ためのものとなる (Segal, 1991/1994)。そのため、シーガル (1991/1994) は、「夢の内容だけを追いかけることには限界がある」と、夢が象徴化される程度、夢が語られる様子、夢がセッションの中で果たす機能を考慮に入れるよう示唆する。その上で分析家が「諸々の投射による同一化を包み込み、理解し、そして最後には解釈」できれば、患者に「心的空間を回復し象徴機能を回復する力になるひとつの包むもの」がもたらされ、「夢見る力を回復することができる」とした (Segal, 1991/1994)。まず夢見る力を回復し、徐々に夢内容に迫ることで、分析作業で得られた洞察の統合を目指す過程は、対象関係論学派の特徴と思われる。

③対人関係学派—サリヴァン、ホーナイ、ボニーム

サリヴァン (1953/1976) は、「精神医学とは対人関係の学問である」と主張した上で、夢の中の相手は「全くの幻影」ではあるが、夢も「やはり対人的な現象」とする。夢では、「対人关系的な現象はしばしば退行的」になり、「感情をぶつける対象の置き換え」が起こり、不安や安全喪失感が避けられるが、当人が直面する対人的な場が非常に深刻な事態であると夢はその傾向を果たせず、例えば不安で目覚めた人の生活は、不安の種が非常に多く含まれた状態と推定される (Sullivan, 1953/1976)。そのため、患者が夢を語りたいと促される場合、その夢は「患者の重要な問題を劇として表したもの」として特に重視した (Sullivan, 1953/1990)。サリヴァン (1953/1990) は、夢の「潜在的な内容」を取り上げないと明言し、「話す時の装飾部分を剥ぎ取って同意による確認という一般的過程をもぐらせるならば、夢主もこれまでは安全保障操作のためにまったく意識するのを阻まれていた人生問題の面を多少とも意識するようになる」と、治療的意義を述べた。一方、患者の不安が夢を話すうちに制御できなくなる場合、患者は完全な意識を維持すると破壊的になる状態としてただちに介入すべきとの危険も示唆している。

ホーナイは、神経症的な人の夢を主に論じた。神経症的な人には、抑圧された様々な衝動があるが、拘束のない夢の中では抑圧された感情が覚醒時よりもはっきりと感じられるため、夢はその感情を理解するのに役立つ。また、夢は現存の感情の単なる反映ではなく、抑圧された欲求の表現でもあるとして、更に重要な夢の特徴に「願望的思考」をあげ、例えば不安が生じる夢では相反する二つの強力な欲求が衝突していると考え (Horney, 1942/1981)。夢には、心的葛藤解決に用いる手段も表されるため、夢を引き起こした刺激との関連から、患者に恐怖や

攻撃を感じさせる経験が何かに加え、その経験に対する患者の無意識的反応も知ることができ
る。夢分析の過程では、こうした患者の抑圧された傾向が掘り起こされるが、神経症的な人の
「外界と自分とに提示する『前面』」は、不安から自身を守る「戦術」なので、患者は「仮面」
にしがみつき治療への抵抗が生じる (Horney, 1937/1973)。ホーナイは分析医の夢から、患者の
人間関係に加え、分析過程での患者の分析医への敵意と不安を知り役立てるよう示唆する。

ボニーム (1962/1987) も「夢を見ている時でさえも、つねに対人的な文脈の中で生きている」
との立場から、夢は気づかず、また認めたくなかったパーソナリティ上の問題、行動特徴、感
情に目を向けさせるもので、患者は夢を手がかりに対人関係全般に重要な洞察を得ると考える。
分析が進むと、パーソナリティの変化を回避しようと「夢における抵抗」が生じ、治療者への
怒りや不安を伴う夢を見たり、多くの夢を報告して面接時間を潰そうとするため、夢に生じる
病的不安を治療的に扱うことに加え、個人的な象徴が変容した夢など「患者が健康な心を発展
させつつあることをはっきりと示している夢」を見逃さないよう述べる (Bonime, 1962/1987)。
ボニームは自身を文化派と明言し、古典的精神分析に対して、夢に性の問題が明示される場合
も、対人関係、個人内の感情や行動の象徴的表現と捉えるべきこと、普遍的な夢の象徴にも個
人的な意味があり一般化はできないことを強調した。また、欧米文化特有の情動の病理にも触
れ、治療には感情の領域が重要であるため、夢を患者の感情の情報源としても重視した。

対人関係学派は、夢もまた対人関係の場として捉え、夢には患者の対人関係や感情がそのま
ま、より明確に表れるとして、夢を患者の気づきに役立てることが特徴と思われる。

④ラカン派—ラカン

ラカン (1998/2005; 2006) は「我々にとって重要なのは無意識の欲望です」と述べ、「無意識
が最初に明らかにしたのは、まず、そして何よりもエディプス・コンプレックス」であり、「無
意識の解明において重要なのは、幼児期の健忘です。それは、母親に対する幼児のさまざまな
欲望という事実であり、その欲望が抑圧されているという事実についての健忘です」として、
フロイトの文献で引用された夢や、ラカン自身が臨床実践で得た夢に、非常にはっきりこの欲
望が示されることに言及する。フロイトが単純な欲望成就とした子供の夢にも、「まったく単純
な満足の経験とは異なっています」と述べ、エディプス・コンプレックスに基づく見解を強調
した (Lacan, 1998/2005; 2006)。また、ラカン (1966/1977) は、「フロイトは、夢が文字通りに
聞かれなければならないという取り決めをしている」ことを重視する。ラカン派では、夢にお
ける欲望は「さまざまなシニフィアンとしてそこにあります…夢のなかで起きていることがシ
ニフィアンのさまざまな様態や変形に従っており、隠喩と換喩、圧縮と移動の構造に従ってい
る」として、圧縮の過程を隠喩と、遷移の過程を換喩と関連づけ、「個々の夢のなかで分節化さ
れるものの解釈を通して、…幼年期に起こり、抑圧されてしまった本源的なものにつねに結び
つけるような何か」を知ることを分析の目的とする (Lacan, 1998/2005; 2006)。

(2) 個人心理学派—アドラー

アドラー (1932/1984) は、フロイトの夢理論に「夢の考えと昼の考えとを対立する矛盾とし
て扱ういかなる理論も、非科学的」「夢が性的背景を持つとされることが本当であるなら、夢は、
パーソナリティ全体ではなく、パーソナリティの一部にすぎないものの表現」となると述べた
上で、「夢を見ている人と目覚めている人とは、同じ人間なのであり、夢の目的は、このひとり

の一貫したパーソナリティに適應できるはずである」との立場をとる。アドラー (1932/1984) は、「夢に、未来に関する特別の意味を与える傾向が、今日まで保たれてきたこと」、夢が隠喩的、象徴的に表されることから、夢は、困難場面でなされる常識の要求に対して「人生のスタイルの支持と正当化を提供する」ものであり、「夢の目的は、それがあとに残す感情である」「あらゆる夢は、自己陶醉、自己催眠である」と指摘する。夢には夢見手の日常生活と同じパーソナリティと自己欺瞞の手段が現れるとの考えから、夢の解釈は常に個人的なものであり、象徴の定式化も不可能とされる。アドラー (1932/1984; 1947/1957) は、「彼がどのようにして自分自身を欺いているかを理解しないかぎり、彼を助け得るいかなる治療もない」として、夢と人生のスタイル全体の関係から夢見手の態度を知ることによって「彼の性格の手がかり」を得て、「彼の目を開かせ、彼の人生のスタイルを続けるのに熱心でないようにさせなければならない」と述べる。「諸問題の解決に確信が持てないときにだけ、また現実が睡眠中でさえ重くのしかかり、難問をつきつけるときにだけ夢を見る」ことから、個人心理学では「治療が進むにつれて夢が変化し、より自信のある態度が顕わになる」ことが目指される (Adler, 1932/1984)。

(3) 分析的心理学派

① 分析的心理学派—ユング、ディークマン、フォン・フランツ

ユングは夢に隠された意味はなく、夢のイメージ自体に意味があると考え、夢をクライアントの予後、治療への示唆、セラピストに対する態度についても明らかにするものとして心理療法場面で特に重要視した。ユング (1948/1974) は、無意識の「目的志向性」が夢に現れるとの視点から、意識の態度が一面的に強調されすぎると、無意識はそれに対して補償的に働き、意識の態度の変容をめざす傾向があることを指摘し、夢の「補償機能」を提唱した。また、夢の中の対象を現実の対象そのものとして客観水準で解釈する見方とは別に、「主観水準」の解釈を提唱し、夢の中の対象も夢見手のパーソナリティでありコンプレックスと捉え、それらの意識への統合を目指した (Jung, 1948/1974)。一方で、意識状況との関係の見えない夢では、「夢のイメージの非常に多くが個人的というより集合的性質を持つことが経験された」ことから、こうした夢のイメージを理解するために「元型」の概念、「拡充法」という技法を提唱した (Jung, 1987/1992)。集合的無意識から生じる夢には夢見手が全く連想を思いつかないことが多く、解釈には象徴、神話的モチーフを利用することが役立つとされる。また、夢系列ではそれぞれの夢が互いに意味深く結びついており、それらは「ある中心的な内容を繰り返し異なった側面から表現しようとしているかのよう」に見えることを踏まえ、夢を単独ではなく系列で扱い、夢に繰り返されるテーマとその変容過程にも着目すべきことを示唆した (Jung, 1987/1992)。

ディークマンは、夢と日中の関連を重視し、特に夢の補償過程での夢の私、夢自我の役割を強調する。夢自我が無意識の提示する体験と行動を実行することで、影の側面は自我の無意識的部分に入り、ようやく意識的に変容する可能性が生まれると考えるためである。ユングによる夢の補償機能は更に展開され、建設的、潜在的な問題解決の可能性を提示する「未来指向的機能」と、負の補償効果を持つ「還元的機能」が提唱された (Diekmann, 1980/1988)。

フォン・フランツは、若い人の夢が外的適応に向けて動くのに対し、中年期以降の人の夢は内的生活への適応、個性化に向け動くことを指摘する。特に老人の分析では、生命の身体的な終りと明らかなその死後の継続というテーマを象徴的に示す夢が繰り返し現れることから、「神

秘体」という錬金術的神話的象徴を取り上げ、死に直面した人の夢には「深い変容、生のプロセスのために意識が用意すべきこと」が示唆されると考えた (Franz, 1984/1987)。一方、夢の危険な側面を「呑みこむ無意識」と言及し、「夢の世界は、現実には生きている生活とのいきいきとバランスの取れた対話の中にある時にのみ、建設的」とも強調する (Franz & Boa, 1988/1996)。

分析的心理学派では、夢をイメージのまま捉え、意識的態度への補償の側面から検討し、意識状況と関連の見えない夢は集合的無意識からも素材を得ながら、個性化過程に役立てる。

② 元型的心理学派—ヒルマン

ヒルマン (1983/1993) は「元型的心理学はイメージと共に始まる」と述べた上で、「イメージする活動が最も本来的かつ範例的に現れてくるのが夢」と、夢のイメージを重視した。ヒルマン (1983/1993) は「イメージに忠実に添うこと」は、「元型的心理学の方法の黄金律」であるとの考えから、夢では「他のイメージの中に交じって当人自身が一つのイメージとして行為し」「当人がイメージのなかにある」ことに意味があるとする。そのため「どんな夢を扱うにも、私が決まりの大もととするのは、夢を活かしておくことである……さらには、手付かずのままでよいという考えに繋がる」と、従来の夢解釈に異議を唱え、夢の自我をそのまま夢見手とみなし、自我に限り客観水準に留め置くことにも疑問を呈した (Hillman, 1979/1998)。「夢の中のイメージは我々に好意を抱いていて、我々を支持し、しつこく促し、我々が自分で自分自身を理解しているよりももっと深く我々のことを理解してくれていて、我々の感覚と精神を拡大し、我々に与える新しいものを常に作り出していく」との考えから (Hillman, 1983/1993)、夢見手が夢を日中の出来事と関連づけるのでなく、「夢の自我がよみの国に親しみ、現つての国のそれとは違う掟に従いつつ振る舞えるよう」促すことが分析家の役割とされる (Hillman, 1979/1998)。

③ プロセス指向心理学派—ミンデル

ミンデル (1982/2002) は、身体にも個性化の過程があると、「内的な身体感覚」である「ドリームボディ」の概念を提唱し（「ドリームボディ」(Mindell, 1982/2002)の序文でフォン・フランツは「古代から伝わる『サトル・ボディ』という思想の再理論化」と指摘）、ドリームボディ・ワークによる個性化過程の促進と「パーソナリティの漸進的な結合」を目指した。ドリームボディは身体、夢を通して現れるとの考えから、ドリームボディ・ワークにはボディ・ワークと夢分析が併用される。ボディ・ワークは、夢の体験を拓けることで、無意識を理解する可能性を全般的に高め、また夢を語ること自体からも精神的・身体的な緊張が和らげられる。一方、ドリーム・ワークでは、夢のイメージの色彩を強めてイメージさせたり、特定の対象の「増幅」を促したり、夢の一部を演じて夢見手に見せたりと、夢見手の視覚、身体感覚にも働きかけ、ドリームボディが視覚化される (Mindell, 1985/1996)。ワークにより夢が統合されると、続いて見られる夢の性質には明白な変化が生じるため、更に個性化過程の促進が目指される。

(4) ゲシュタルト心理療法—パールズ

パールズ (Perls, 1973/1990) は、「今—ここ」での経験を重視するゲシュタルト療法を提唱したが、夢に対しても、「夢の生々しさ」や「夢を見ている間は、あなたは、その場面の中に本当にいると言える、真に経験していると実感する」ことに意義を置く。そして「夢の中で物として登場する人々の存在、そして夢の中に出てくる断片や人物や事物や雰囲気はみんな、我々の断片化された自己」と考え、「バラバラに分割され、自分のものとして所有されていない、疎外

された自己を統合し、もう一度丸ごと一人のパーソナリティの持ち主、全人的人間になること」を目的に「夢のワーク」という手法を提唱した (Perls, 1973/1990)。夢のワークでは、夢を解釈しないことが強調され、夢見手は劇を演じるように夢を再現するために、舞台を設定し、俳優、小道具など、夢の中に登場する全てを演じてみる。パーソナリティが変化し始めると、また別の実存的メッセージを持つ夢を見るようになり、繰り返し何度も見る夢は「大変重要な実存的問題が問われている」ものとして強調される (Perls, 1973/1990)。パールズ (1973/1990) が「潜在能力を妨害する要因である中間領域を理解するためには、夢ほど格好な方法は他にない」と述べるように、ゲシュタルト療法は夢のワークを重視している。

(5) 現象学派—ロジャーズ、ジェンドリン

ロジャーズ (1957/1966) は、建設的なパーソナリティの変化が起こるための六条件を上げた上で、夢分析を含め、セラピィの技術には、「前にあげた本質的条件を伝達するための通路となることができる」との役割を期待する。一方で「種々のセラピィの技術は、それが一つの条件を満たすための通路としてどの程度役だつかということを除けば、比較的重要なものでない」と、特別に夢分析を取り上げて理論を展開してはいない (Rogers, 1957/1966)。

ジェンドリン (1986/1998) は、夢が「怒り、恐れ、悲しみといった普通の感情」に加え、「分類できない、独特の感じ」を残すこと、夢の内容を忘れたときにもフェルトセンスが残ることに着目し、フォーカシングを夢に応用した。夢の分析中に気づきが起これと、身体の緊張がほぐれてフェルトシフトが実感できるとして、夢分析の妥当性を身体感覚と照らして検討する。また夢の中の「できない」といった強い抵抗感や「ぴったりこないもの」に留まること、「バイアスコントロール」を用いて日頃の態度とは逆の、否定的な方向を試すことが、成長のために新しい発見をもたらすとされる (Gendlin, 1986/1998)。ジェンドリンは、一つの学派の理論にとらわれないことを利点として、夢の象徴作用、夢のワークなど、諸学派の視点をフォーカシング時の質問に組み入れており、伝統的な夢分析の方法が併用されることは特徴的である。

4. 諸学派の夢理論を通して

(1) 夢に現れるもの、夢の役割—諸学派の夢理論の比較から

フロイトと後の諸学派の夢理論は、夢に隠された内容を解釈から探り、分析の情報源とする立場と、夢をそのままの形で捉え、夢見手の夢の中での体験を重視する立場とに大別される。

精神分析学派では、フロイトを始め、自我心理学派、対象関係論学派、ラカン派が、夢に隠された内容を解釈から明らかにし、分析に役立てる立場をとる。夢に隠されたものとして、初期からフロイトは、幼少期の性欲動、エディプス葛藤を想定したが、フロイトへの回帰を掲げるラカン派もこれに近く、夢の語法、文法に注目して解釈を行い、患者の無意識の欲望の解明に夢を用いている。また、フロイトは、不安夢、懲罰夢を自我と批判的審級、イドの関係から考察したが、この側面を引き継いだのが自我心理学派である。自我の役割を強調する自我心理学派は、夢での自我の働きにも信頼を置き、精神分析の適応対象を広げたり、自由連想の情報源を豊かにするものとして夢を用いる。これに対し、対象関係論学派では、フロイト (1925/2010) の言及した「非道徳的、近親相姦的、倒錯的な欲望の蠢き」を成就する夢の側面が注目され、早期のエディプス葛藤、無意識の幻想が夢に現れるとの考えから、自我心理学派とは対照的に

夢の破壊的側面も主張された。対象関係論学派は、分析過程で無意識の幻想が抱えられ、象徴化された夢として見られるようになることに重点を置き、分析と並行して夢を扱っている。

一方、対人関係学派は、夢の潜在的内容を仮定しない点で、精神分析学派の中でフロイトの夢理論とは遠く、日中からの一貫したパーソナリティが夢に現れると主張するなど、むしろ個人心理学派との類似がうかがえる。両学派は夢が日中の生活と離れた安全な場である点に注目し、日中には覆い隠されるようなクライアントの対人関係のあり方、パーソナリティの問題が夢では浮き彫りになるとして、夢を患者の気づきに繋げるよう用いている。また、夢に現れたイメージの体験に重点を置くのが、分析的心理学派、ゲシュタルト心理学派である。これらの学派は、夢の中の対象を夢見手の諸側面を表すものと捉え、それらと夢に関わることが諸側面の統合に繋がり、クライアントに変容をもたらすとして、夢の中の体験の意義を強調している。今ここのクライアントに焦点を当てる現象学派も、夢へのフォーカシングの適用から、夢での体験を重視する立場に近いと考えられるが、ジェンドリンは諸学派の視点を組み入れる利点を強調しており、夢見手に最もなじむあり方で夢を扱おうとする折衷的な立場と思われる。

(2) 夢を扱う視点について—諸学派の心理療法家の実践に基づく示唆

学派間で、夢理論には異同が現れたが、夢分析の実践に基づく知見には共通点が多く、これは現在の心理療法にも通じる示唆と思われる。フロイトは、夢では無意識の欲望が感覚像で呈示され、視覚的に成就されることに注目したが、諸学派とも、夢が夢見手に視覚的に提示されることが治療的に働く点に言及している。対人関係学派、分析的心理学派、ゲシュタルト心理学派などが、夢のイメージとその体験に注目して夢を扱うことは先述したが、精神分析学派でも、エリクソン、ビオンが、夢が視覚化される治療的意味を重視して論を展開している。河合(1971)は、夢はイメージによって夢見手に事実をつきつけ、「直接体験を得させることに大きい意義がある」と述べたが、夢が視覚像として呈示され、夢見手に感覚的に体験されることは、夢が臨床的に意味を持つ重要な特徴と思われる。加えて、フロイトは夢での情動を、夢工作による改変を蒙りにくいと、主要な解釈時の手がかりとしたが、夢に隠された内容を想定するかにかかわらず、どの学派でも夢の残す情動はそのままに受け取っていることは注目すべきと思われる。特に対人関係学派、個人心理学派では、夢で生じる情動に重点を置いて情報源とするが、クライアントの夢を聞く際、夢の私の情動への着目は一つのポイントと思われる。

フロイトは回復夢を分析から逃れたいという欲望成就としたが、諸学派の間では、夢に分析過程が統合されること、または夢から気づきが得られることで、心理療法過程で夢が変化することが示された。分析過程と夢は相互に影響し、心理療法の展開に繋がることは、諸学派の実践の中で実感されてきた夢分析の意義であり、現在まで夢が心理療法で重視される理由と考えられる。また、特に対象関係論学派が注目した「夢を見る能力」(Bion, 1977/1999)についても、自我が「夢を恐れるがゆえに睡眠を放棄する」というフロイト(1917/2010)の考察を始め、アイデンティティ混乱時の「夢によって夢みられるという体験」(Erikson, 1968/1970)、「呑みこむ無意識」(Franz, 1984/1987)など、学派間で類似の現象が挙げられた。夢による圧倒は、夢が夢見手に体験的に提示されるという特徴の反面と思われる。夢を聞く際、その時点での夢見手の自我の強さに注目しながら、分析により自我と夢自我の成長を促す視点を持つとともに、クライアントが夢に圧倒される危険にも留意することは、現在の心理療法に通じる示唆である。

5. 参考文献

- Adler, A. (1932). *What Life Should Mean to You*. London: George Allen & Unwin. 高尾利数 (訳) (1984). 人生の意味の心理学. 春秋社. pp. 108-137.
- Adler, A. (1947). *Menschenkenntnis*. Zürich: Rascher. 山下肇 (訳) (1957). 現代人の心理構造. 日本教文社. pp. 51-79, 108-143.
- Bion, W. (1977). *Seven servants*. New York: Jason Aronson. 福本修・平井正三 (訳) (1999). 精神分析の方法. りぶらりあ選書. pp. 13-28.
- Bonime, W. (1962). *The Clinical Use of Dreams*. New York: Basic Books. 鐘幹八郎・一丸藤太郎・山本力(訳) (1987). 夢の臨床的利用. 誠信書房. pp.258, 296, 412
- Diekmann, H. (1980) *Träume als Sprache der Seele*. 野村美紀子(訳) (1988). 魂の言葉としての夢. 紀伊国屋書店. pp. 104-138.
- Erikson, E. (1963). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会. みすず書房. pp. 239-246.
- Erikson, E. (1968). *Identity : youth and crisis*. New York: W.W. Norton. 岩瀬庸理 (訳) (1970). 主体性(アイデンティティ): 青年と危機. 北望社. pp. 273-290.
- Erikson, E. (1977). *Toys and reasons*. New York: W.W. Norton. 近藤邦夫 (訳) (1981). 玩具と理性. みすず書房. pp. 137-158.
- Franz, M-L. (1984). *Traum und Tod : Was uns die Träume Sterbender sagen*. München: Kösel. 氏原寛 (訳) (1987). 夢と死 : 死の間際に見る夢の分析. 人文書院. pp. 5-16, 206-208.
- Franz, M-L. & Boa, F. (1988). *The way of the dream*. Toronto : Windrose Films. 氏原寛 (訳) (1996) 夢の道. 培風館. pp. 3-53, 223-243.
- Freud, A. (1974). *Introduction to psychoanalysis*. London : Hogarth Press. 岩村由美子・中沢たえ子 (訳) (1981). 児童分析入門. 岩崎学術出版社. pp. 19-35.
- Freud, A. (1974). *The ego and the mechanisms of defense*. New York: International Universities Press. 黒丸正四郎・中野良平 (訳) (1982). 自我と防衛機制. 岩崎学術出版社. pp. 9-22.
- Freud, S. (1900). *Die Traumdeutung*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 新宮一成 (訳) (2007; 2011). フロイト全集 4; 5. 岩波書店.
- Freud, S. (1917). *Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 新宮一成 (訳) (2010). フロイト全集 14. 岩波書店. pp. 255-271.
- Freud, S. (1922). *Traum und Telepathie*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 須藤訓任 (訳) (2006). フロイト全集 17. 岩波書店. pp. 311-342.
- Freud, S. (1923). *Bemerkungen zur Theorie und Praxis der Traumdeutung*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 三谷研爾・吉田耕太郎 (訳) (2007). フロイト全集 18. 岩波書店. pp. 175-189.
- Freud, S. (1925). *Einige Nachträge zum Ganzen der Traumdeutung*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 大宮勘一郎 (訳) (2010). フロイト全集 19. 岩波書店. pp. 235-247.
- Freud, S. (1931). *Vorwort zur dritten (revidierten) Auflage der englischen Ausgabe der Traumdeutung*. Gesammelte Werke. Main: Fisher. 高田珠樹 (訳) (2011). フロイト全集 20. 岩波書店. pp. 247.
- Gendlin, E. (1986). *Let Your Body Interpret Your Dreams*. Wilmette: Chiron Publications. 村山正治

- (訳) (1998). 夢とフォーカシング. 福村出版. pp. 5-15, 66-165.
- Hillman, J. (1979). *The dream and the underworld*. New York: Harper & Row. 實川幹朗 (訳) (1998). 夢はよみの国から. 青土社. pp. 130-164.
- Hillman, J. (1983). *Archetypal psychology*. Dallas: Spring Publications. 河合俊雄 (訳) (1993). 元型的心理学. 青土社. pp. 13-87.
- Horney, K. (1937). *The neurotic personality of our time*. New York: W. W. Norton. 我妻洋 (訳) (1973). 現代の神経症の人格. 誠信書房. pp. 225-231
- Horney, K. (1942). *Self-analysis*. New York: W. W. Norton. 霜田静志・国分康孝 (訳) (1981). 自己分析. 誠信書房. pp. 158-162.
- Jung, C. G. (1948). *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes*. Zurich: Rascher. Hull, R. F. C. (訳) (1974). General Aspects of Dream Psychology. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1948). *Vom Wesen der Traume*. Zurich: Rascher. Hull, R. F. C. (訳) (1974). On the Nature of Dreams. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1987). *Kinderträume*. Olten: Walter-Verlag. 氏原寛・李敏子・青木真理・皆藤章・吉川真理 (訳) (1992). 子どもの夢 I. 人文書院. pp. 17-50.
- 河合隼雄 (1971). コンプレックス. 岩波書店. pp. 158.
- Klein, M. (1952). *Developments in psycho-analysis*. London: Hogarth and the Institute of Psycho-Analysis. 西園昌久・牛島定信 (訳) (1983). 子どもの心的発達. 誠信書房. pp. 165-204.
- Klein, M. (1971). *Die Psychoanalyse des Kindes*. München: Ernst Reinhardt Verlag. 小此木啓吾・岩崎徹也 (訳) (1997). 児童の精神分析. 誠信書房. pp. 3-17.
- Lacan, J. (1966). *ÉCRITS*. Paris: Seuil. 佐々木孝次 (訳) (1977). エクリ II. 岩波書店. pp. 237-287.
- Lacan, J. (1998). *Les formations de l'inconscient*. Paris: Seuil. 佐々木孝次・原和之・川崎惣一 (訳) (2005; 2006). 無意識の形成物 上;下. 岩波書店. pp. 235-261, 313-339 (上); 31-57 (下).
- Mindell, A. (1982). *Dreambody The Body's Role In Revealing the Self*. 藤見幸雄 (訳) (2002). ドリームボディー自己を明らかにする身体. 誠信書房. pp. 3-13, 176-217.
- Mindell, A. (1985). *River's Way*. London and New York: Routledge & Kegan Paul. 高岡よし子・伊藤雄二郎 (訳) (1996). プロセス指向心理学. 春秋社. pp. 16-62.
- Perls, F. (1973). *The Gestalt Therapy and Eye Witness to Therapy*. Science and Behavior Books, Inc. 倉戸ヨシヤ(訳) (1990). ゲシュタルト療法—その理論と実際. ナカニシヤ出版. pp. 78, 137-231.
- Rogers, C. (1957). *The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change*. 伊東博 (訳) (1966). サイコセラピーの過程. 岩崎学術出版社. pp. 136-139.
- Segal, H. (1991). *Dream, phantasy and art*. London: Tavistock/Routledge. 新宮一成 (訳) (1994). 夢・幻想・芸術. 金剛出版. pp. 107-124.
- Sullivan, H. (1953). *Conceptions of modern psychiatry*. New York: W. W. Norton. 中井久夫, 山口隆 (訳) (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房. pp. 86-90.
- Sullivan, H. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹八郎 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房. pp. 370-386.

(臨床教育学専攻講座 博士後期課程 2 回生)
(受稿 2016 年 9 月 9 日、改稿 2016 年 12 月 1 日、受理 2016 年 12 月 26 日)

心理臨床場面における夢の用いられ方

— 諸学派の理論の比較から —

粉川 尚枝

夢は心的現象として、フロイトの「夢解釈」で心理療法場面に導入されて以降、諸学派で主要な技法とされてきた。本論文では、諸学派の夢理論を比較検討し、夢に現れるものとして何が想定され、どのように心理療法に役立てられてきたのかを考察し、夢を治療的に扱うために役立つ視点を得ることを目的とした。フロイトと諸学派の夢理論は、夢に隠された内容を解釈から探り、分析の情報源とする立場と、夢をそのままの形で捉え、夢見手の夢の中での体験を重視する立場とに大別された。心理療法家たちの夢分析の実践に基づく知見からは、夢が夢見手に視覚的に呈示され、感覚的に体験されることの持つ治療的側面や、心理療法過程で夢が分析と相互に影響し合いながら変容し、心理療法の展開に繋がることが示された。また、「夢を見る能力」、クライアントが夢に圧倒される危険についても諸学派で言及され、これは現在の心理療法にも通じる示唆と思われる。

The Approach toward Dreams in Psychotherapy: Comparison Between Theories about Dreams of Schools of Clinical Psychology

KONAKAWA Hisae

Dreams were introduced as a psychic phenomenon by Freud in “*Traumdeutung*.” Since then, several schools of clinical psychology have attached importance to dreams. To approach dreams therapeutically, this paper compares the theories of several schools regarding dreams: i.e., what dreams are thought to show or how dreams have been used in psychotherapy. The theories about dreams of Freud and other schools were divided into two groups—one explores the meaning hidden in dreams by interpretation to use it as source of information for analysis, and the other attaches importance to the dreamers’ experience in dreams. Regardless of school, the psychotherapists’ knowledge based on practice of dream analysis indicated that dreamers are shown their dreams visually and experience dreams with their sensory images, which has a therapeutic aspect, and that dreams and analysis mutually influence each other, and as dreams change they develop psychotherapy. In addition, “the ability to dream” and the danger that dreams can overwhelm clients are also mentioned in several schools, which has implications for current psychotherapy.

キーワード：心理療法，夢，文献研究

Keywords: Psychotherapy, Dream, Literature review

